

1. た・づ・な

育成運動の昨今

(社)全国乗馬倶楽部振興協会
会長 池本 元一



1. 大きく変貌した育成運動

日本ほど、育成運動が変化してきた国はないのではないかと。私が昭和40年から7年間、日高育成牧場にいた頃、追い運動や騎乗馴致を実施する牧場はまだごく少数であった。

しかし、その後何年も経たないうち、強い馬作り運動がブームとなり、共同育成牧場設置の機運が高まり、JRAの助成もあり、あちこちに育成施設が出来てきた。そして個々の牧場でも育成施設に力を入れる者が出てきて、これが全国的な風潮となっていったのである。その頃、どこの生産地に行っても、かけ声とともに、子馬の集団を乗馬で追う光景が見られたものである。その最盛期は昭和50年代の中頃ではなかったかと思っている。

そのうちに、その追い運動も急速に廃れていった。

一方、騎乗馴致については、昔は競馬場の調教師が実施していたが、それもだんだん実施しなくなった関係で、生産地でも騎乗運動の気運が高まり、そのうち、立派な騎乗調教専門施設が数多く出現し、外国からの調教技術者が、多数、生産地、育成地に見られるようになってきた。

2. どうして追い運動が廃れたのか？

昭和53年、競走馬総合研究所の所長となったが、当時、病理学研究室に、現在のBTCの兼子樹広博士がおり、特に現役競走馬の骨折の問題に取り組んでいた。そして骨折は骨の病変部から発症していることを突き止めた。その病変部の主なものは骨軟骨症、骨端症であり、これは発育中の幼駒時期の運動負荷等により発症することが推察された。

かねがね、骨の固まらない幼駒の無理な追い運動に疑問を感じていた私は、このことを日本軽種馬協会の機関誌に発表してもらい、何人かの生産者に、追い運動に気をつけるように警告したものである。初めのうち半信半疑で聞いていた生産者の中に、追い運動を課した馬群と課さない馬群との比較をする

者が出てくるなどして、両者にあまり差がないと言い出す人が出てきて、追い運動への疑問が広がり始めた。

追い運動は楕円形馬場を作ったり、追うための乗馬が必要であったり、人手と時間を食うため、負担に感じていた生産者たちは、追い運動を思い切ってやめるものが次々に出てくるようになってきた。それは昭和から平成への移行期が中心であったと思う。そして今では、追い運動を見かけることが珍しくなってきたのである。

3. 追い運動は何時始められたのか？

日本は、競馬も軽種馬の生産も後進国といえる。そこで競馬先進国で、追い運動が実施されていたかどうか、いろいろ資料を探して見たが、まったく見当たらない。つまり、追い運動は日本独特の運動方法であると言える。

戦前、日本のサラブレッド生産を支配していたのは、岩手県の小岩井農場と千葉県の下総御料牧場であった。両牧場の名物は育成馬の追い運動であったのは有名であった。これら牧場が追い運動を始めた経緯については、資料が見あたらないが、想像は出来る。

戦前は、富国強兵のため、軍馬生産に力を入れた事はよく知られたことである。

当時、軍馬補充部が設置されたが、全国に支部、出張所約20カ所を持ち、その総面積は約11万町歩に及ぶ大規模な組織であった。主な事業は軍馬の供給、育成および購買となっており、全国生産地での購買頭数は多い時の昭和11年では約8千頭を数え、その半数以上は1歳馬、2歳馬であったので、かなりの数の育成馬がいたことになる。その育成方法を調べようとしても、各補充部の詳しい資料は、終戦時に軍事秘密として徹底的に廃棄されたので、今では全く存在しない。

軍人は鍛錬という言葉が好きである。民間にも軍用候補馬鍛錬のためのいろいろな施策がなされており、全国に鍛錬馬場が作られ、それらが、現在の地方競馬の母体となっているのである。結論を言えば、軍馬補充部の育成馬は、軍人の発想により追い運動が課せられた公算が大であると思う。小岩井農場と下総御料牧場はその伝統を受け継いだものである。